

接触動詞の多義性について

田辺 英一郎

Polysemy of Contact Verbs

Eiichiro TANABE

(Received on Jan. 29, 2016)

Abstract

In this paper, we explain the polysemy of contact verbs and their corresponding various syntactic forms in a comprehensive way. We represent the event frame in an image schema and make use of some cognitive grammar based concepts such as profile, trajector and landmark, which are mainly cited from Langacker (2008). We show that the event frame of each construction is derived through a series of cognitive operations like profiling, deprofiling, or reinterpretation. We also show that the image-schematic features of each frame make it possible to predict their corresponding syntax appropriately if we follow some cognitive rules.

キーワード: 事象フレーム、プロファイル、トラジェクター、ランドマーク、認知的操作

1 はじめに

Rappaport Hovav and Levin(1998)¹⁾(以下、RHL)は、sweep、wipeなどの接触動詞(contact verbs)が、それぞれの多義性により、次のような多様な統語的振る舞いを示すことを指摘している。

- (1) a. Terry swept.
- b. Terry swept the floor.
- c. Terry swept the crumbs into the corner.
- d. Terry swept the leaves off the sidewalk.
- e. Terry swept the floor clean.
- f. Terry swept the leaves into a pile.
- (2) a. Terry wiped.
- b. Terry wiped the table.
- c. Terry wiped the crumbs into the sink.
- d. Terry wiped the crumbs off the table.
- e. Terry wiped the slate clean.
- f. Terry wiped the crumbs into a pile.

RHL(1998: 97-99)

以下に述べることは、(1)、(2)の両方に当てはまる。(b)は接触動詞の文の基本形である。この形が基本形であることは、Levin and Rappaport Hovav(1991)²⁾ や中村(2003)³⁾ が指摘しており、本稿もこの指摘は基本的に正しいと見なす。(a)は接触面を表す目的語が省略された形である。RHLは、復元可能なコンテキストが与えられれば、このような形が可能であるとしている。(c)、(d)は使役移動、(e)は状態変化、(f)は作成を表す。これらは基本用法(b)からの拡張用法であり、(b)および(a)が活動事象(activity)を表すのに対し、これらは達成事象(accomplishment)を表す。

RHLが挙げる接触動詞の例は(1)、(2)のみだが、本稿は次のような例も考察対象とする。

- (3) a. Terry swept the leaves off.
- b. Terry wiped the crumbs off.
- (4) a. John wiped a cloth over the table.
- cf.*John wiped a cloth.
- b. John rubbed a cloth against the door.
- cf.*John rubbed a cloth.

(3a, b)は、それぞれ(1,2d)から接触面を表す項を省略

した形に当たる。(4)では、道具を表す語句が目的語となり、場所を表す語句が斜格に降格され、この生起が義務的である。接触動詞については、(4)のような表現形式は必ずしも生産的ではないが(Dixon 2005:114)⁴⁾、本稿はこうした形式も一考に値すると考える。

本稿は、(1)、(2)、(3)および(4)は全て「接触行為+移動/状態変化」というフレームが関わっていると考え、これらの意味的な共通点と相違点を明確にし、かつ、それぞれの文法形式を予測可能にする事象フレームを提案する。この事象フレームは、イメージスキーマで表示され、プロファイル、トラジェクターおよびランドマークといった認知文法の考え方を援用している点が特徴である。

2 テンプレートの拡大による説明の検討

RHLは、動詞のテンプレートの拡大に基づいて動詞の意味拡張およびこれに伴う構文拡張を説明している。テンプレートとは、ここでは、述語分解表示された動詞の事象構造のことである。sweepを例にとると、この動詞の中核的な意味は[x ACT <SWEEP> y]というテンプレートで表される。この事象構造は(1a, b)のsweepの意味を表す。y項に下線があるが、これはこの項が必ずしも統語的に実現しなくてもよいことを示す。上で、接触動詞の単なる接触行為の意味が、状態変化や使役移動などへ拡張すると述べたが、これをテンプレートの拡大で説明すると次のようになる。同じくsweepを例にとると、状態変化へ意味拡張する場合は[x ACT <SWEEP> y]に[BECOME [y <STATE>]]が付け足され、使役移動へ拡張する場合はこれに[BECOME [z <PLACE>]]が付け足される。こうした操作により、達成動詞sweepの事象構造として次のようなものが生成される。x項は動作主、y項は場所(接触面)、z項は除去物をそれぞれ表す。

- (5) a. [x ACT <SWEEP> y] CAUSE [BECOME [y <STATE>]]
 b. [x ACT <SWEEP> y] CAUSE [BECOME [z <PLACE>]]

RHL(1998: 119-120)

(a)は(1e)、(b)は(1c, d)の意味をそれぞれ表す。RHLによると、テンプレートは(5a, b)のような達成動詞のそれになるまで拡大可能である。また、上位事象に下位事象が付け足される際、この二つの意味関係は

関数CAUSEによって保たれる。なお、作成を表す(1f)については、テンプレートの拡大による説明の中では言及されていない。

RHLは、テンプレートの拡大の可否という点から、breakに代表される状態変化動詞とwipe、sweepあるいはrun、whistleなどの活動動詞との決定的な文法的違いを説明している。しかし、テンプレートの拡大は、状態→到達あるいは活動/到達→達成などの意味拡張を説明する上での根本原理のようなものであり、それぞれの動詞の意味の細部に立ち入る性質のものではない。よって、テンプレートの拡大のみでは、それぞれの接触動詞の意味が意味拡張に具体的にどう関わっているのかを説明することはできない。本稿は、この点でRHLが不十分であることを指摘したい。(5)について言えば、テンプレートが拡大できるから[x ACT <SWEEP> y]に[BECOME [y <STATE>]]や[BECOME [z <PLACE>]]を付け足せると説明しても、sweepの意味がこうした意味拡張に具体的にどう関わっているかを説明したことにはならない。動詞の意味拡張を具体的に説明するためには、それぞれの意味の細部に立ち入る必要がある。

意味の細部という点で本稿が注目したいのは、sweep、wipeをはじめとする接触動詞の表す行為には、通常、何かを除去するという目的があるという指摘である(中村2003、都築2004⁵⁾、Nemoto 2005⁶⁾など)。このことは、「接触行為+不要物の移動/接触面の状態変化」をひとまとまりの出来事、すなわち一つのフレームと見なすことにも通じるだろう。前節でも述べたように、フレームは本稿においては重要なキーワードでもある。そこで、次節では、本稿が問題とする表現形式をフレーム意味論で説明するBoas(2003)⁷⁾を検討してみたい。

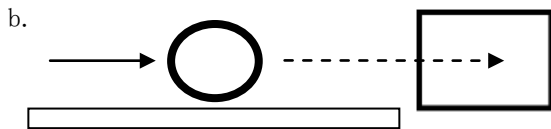
3 Boas(2003)の事象フレームの検討

フレームとは、一般的に言うと、それぞれの語の背後にある、習慣、経験、信念、知覚、さらには記憶などに関する知識構造を指す(Fillmore 1982⁸⁾など)。Boas(2003)は、wipe、sweep、rub、wash、polishなどを不要物除去の動詞(‘removal of unwanted substance’ verbs)と呼び、これらは本稿が問題にする接触動詞に相当する。Boas(2003)は、こうした動詞が表すひとまとまりの出来事を一つのフレームととらえ、これらの意味拡張を説明している。Boasは、こうした動詞が全部で五つの事象フレームを持つと述べている。funnel-sense、removal-sense-1、

removal-sense-2、creation-senseおよびabsorption-senseの五つである。これらのうち、absorption-sense以外の四つが本稿の問題に関わっている。funnel-sense、removal-sense-1、removal-sense-2、creation-senseはそれぞれ、(1,2c)、(1,2e)、(1,2d)、(1,2f)の意味に相当する。Boasはこれらの事象フレームを、イメージスキーマを使って表している。以下、これらの事象フレームに関連する例文、スキーマ表示およびを参与者についての記述を示す。例文は(8)を除き一つだけ挙げるものとする。

(6) Funnel-sense

- a. A couple of inmates were picking up leaves from around the graves, sweeping them into a large black sack.

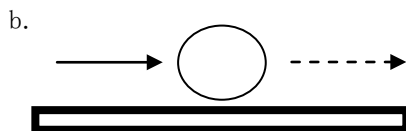


- c. Ag: entity exerting force
Pt: substance
p3: directional PP with a surface or container as its end location

Boas(2003: 206-207)

(7) Removal-sense 1

- a. Hargreave wiped his plate clean with a piece of garlic bread.

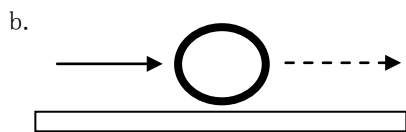


- c. Ag: entity exerting force
Pt: surface, or any object that has a surface
p3: property of surface that holds of the surface after unwanted substance have been removed

Boas(2003: 207-208)

(8) Removal-sense-2

- a. There are tears on his face and I wipe them away.
a'. Can I rub the lipstick off the end of your nose?

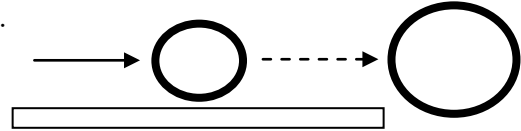


- c. Ag: entity exerting force
Pt: object or substance that may be removed from a surface by employing force to it
p3: location that an object or subject may end up

in as a result of being removed from a surface
Boas(2003: 208-209)

(9) Creation-sense

- a. Julio rubbed the dirt into a pile.
b.



- c. Ag: entity exerting force
Pt: object affected by force emitted by the agent and which subsequently becomes part of a large entity that contains it
p3: entity that comes into existence as the result of the activity performed by the actor upon the patient

Boas(2003: 209-210)

Ag、PtはそれぞれAgent(動作主)、Patient(被動者)の略である。p3は、いわゆる第三の参与者を表す。(6)と(8)のp3は少々分かりづらいが、前者のp3は前置詞句に実現する着点、後者のp3は明示されていない移動物の着点をそれぞれ表す。(6)-(9)のイメージスキーマ表示は、ある表面に位置する物体に動作主の力が伝わり、この物体が移動するといった参与者間の力動関係(force dynamic relation)を表す点が共通している。これにより、四つのフレームに共通する意味、ここでは使役移動の意味を図式的に明示することが可能になる。また、これらの事象フレームは、動作主の力は表面ではなく、表面にある物に向けられている点も共通している。太線で示される参与者は、プロファイルされているものである。(6)-(9)のスキーマは、移動物と着点、接触面、移動物、移動物と構築物がそれぞれプロファイルされていることを表す。Boasは、事象フレームが文を認可する(license)と考えることで文の成立を説明している。ここで言う認可とは、文の意味が事象フレームを事例化することに相当する¹。

いま述べたように、これらの事象フレームは、イメージスキーマにより意味の共通点と相違点が図式的に明示される、という大きな長所がある。イメージスキーマでフレームを表示するという点は、本稿も取り入れたい。しかし、よく見るとこれらにもいくつか問題点があると思われる。まず指摘したのは、上で述べたことだが、動作主の力が表面ではなく、表面にあるものに向けられているという点である。例えばJohn wiped the crumbs from the tableの意味を考えたとき、wipeという動作の対象がthe

tableなのかthe crumbsなのか今ひとつ分かりづらいので、動作主の力は移動物に向けられると考えてもそれほど不自然ではない。しかしここで、中村(2003: 37)の主張に着目したい。中村はJohn wiped the blood from the wall.という例を挙げ、動作の対象はthe wallであってthe bloodではないと述べている。the wall(壁)の表面をふくことはできるが、the blood(血)の表面はふくことができないというのが根拠である。本稿はこの主張を支持し、接触動詞の事例全般に当てはまると考えたい。

Boas(2003)は、スキーマの参加者が統語構造で何らかの文法関係に実現する際にプロファイルがどんな役目をするか明確に述べていない点も問題だろう。(6b)-(9b)のスキーマ表示を見る限り、①プロファイルされる参加者は主語を除く何らかの統語項に実現し、②このうち一つは目的語に実現する、ということは読み取ることができる。ただし、(6b)と(9b)のスキーマはプロファイルされる参加者が二つあるので、単にプロファイルされる参加者に着目しただけでは、どちらが目的語になるかまでは予測できない。例えば、プロファイルされる参加者が二つの時は、力動関係において先行するものが目的語に実現し、もう片方は前置詞句に実現するといった補足が必要になる。

(7b)のスキーマも、プロファイルの役割の曖昧さに関連する問題があるようだ。(7b)では、接触面を表す参加者がプロファイルされている。Boasはこのプロファイルが何を意味するか特に言及していない。他動詞結果構文では、目的語が結果句に叙述される、つまりこれがある種の意味的な際立ちを持つので、これに当たる参加者がプロファイルされることは、直感には一致している。しかし、このスキーマ表示を見ただけでは、これが状態変化事象を表すことまでは読み取りにくい。(7b)は、接触行為によりモノが移動し、これに伴い状態変化が起こるという一連の出来事を明示するスキーマに修正する必要がある。

(8b)のスキーマは、目的語に不変化詞awayが続く構文(8a)とこれに起点を表す前置詞句off the end your noseが続く構文(8a')の両方に同じ形を当てはめている点が問題である。両者は、似てはいるがあくまで異なる構文である。offは確かに、前置詞にも不変化詞にも使えるが、これに名詞句が続く以上(8a')のoffは不変化詞ではなく、前置詞と考えるべきである。ここで、offの代わりにfromを使うと起点を表す参加者を省略できないことにも注意したい。

(10) a. Can I rub the lipstick from your nose?

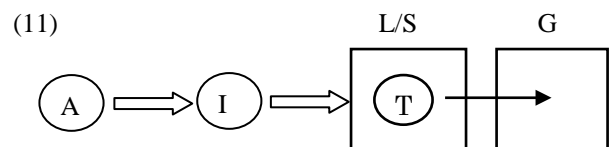
b. *Can I rub the lipstick from?

(10a)と(8a')は構文タイプが同じと考えると、(8b)のスキーマは(10a)にも当てはまるはずだが、このスキーマは起点を表す参加者が義務的に生起することを表していない。(8a')や(10a)のような構文の意味を明示し、かつ、(8b)とは形が異なるスキーマを他に考える必要がある。

以上のような検討をもとに、次節では、本稿が問題にする例を包括的に説明する事象スキーマを提案する。

4 認知文法を援用した事象フレーム

前節にて、動作主の力は移動物ではなく接触面に向けられていると見るべきだと述べた。本稿は、この点を事象フレームの形式に反映させる。本稿は、Boasと同じく、接触行為+移動/状態変化が一つのフレームを成すと考え、イメージスキーマを使ってこれを表示する。しかし、接触行為による除去という事態をよく観察してみると、この事態の参加者は接触面と移動物だけではない。接触行為を行う参加者がまず存在するはずである。また、接触行為は、例えばぞうきんやほうきなどの何らかの道具を使うのが普通であり、除去されるモノが移動するのならこの着点があるはずである。Boasの事象フレームではこうした参加者は省略されているが、本稿は包括的な説明には事象全体を表示する必要があると考え、除去フレームの基本形として、次のようなものを提案する。



二重矢印は力の伝達を表し、一重矢印は除去されるモノの移動を表す。この事象フレームは、計五つの参加者からなる。A、I、L/S、T、Gは、それぞれ、動作主(Agent)、道具(Instrument)、場所/起点(Location/Source)、移動物(Theme)および着点(Goal)を表す。なお、これらの参加者役割は、このスキーマから容易に視覚的に区別できるので、以下の議論ではA、I、L/S、T、Gという表記は省略する。

認知文法を体系的に論じるLangacker(1987⁹⁾, 2008¹⁰⁾は、概念ベースと呼ばれる認知領域の中の注

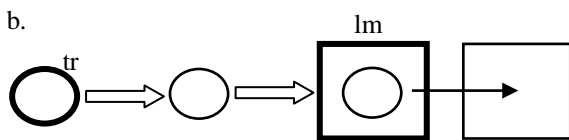
意の焦点が向けられる部分をプロファイルと呼んでいる。よく例に挙がる直角三角形で言うと、この図形全体が概念ベース、この斜辺がプロファイル（の一つ）にそれぞれ当たる。これを本稿に当てはめると、(11)の事象フレームが概念ベースに当たり、このスキーマの中の注意の焦点が向けられる参加者がプロファイルに当たるだろう。前節にて、Boas(2003)は参加者のプロファイルがどんな役目をするか言及していないことを指摘した。一方、本稿は、参加者がプロファイルされるとこれらは統合構造で義務的に実現する、と考えたい。

本稿は、それぞれの参加者がどんな統語項に実現するかをできるだけ予測できる事象スキーマを目指す。そこで援用したいのは、特にLangacker(2008)で詳しく論じられているトラジェクター(trajector)やランドマーク(landmark)といった認知文法の考え方である。Langacker(2008:70)は、プロファイルされる参加者のうち、最も認知的に際立っているものをトラジェクターと呼び、二番目に際立っているものをランドマークと呼んでいる。またLangacker(2008:365)は、主語はトラジェクターをコード化する名詞句であり、目的語はランドマークをコード化する名詞句としている。さらにLangacker(2008:367)は、行為連鎖を表す事態については、この先頭にくる参加者がトラジェクターとなるといった主旨のことを述べている。こうしたLangackerの考えが基本的に正しいとすると、後はランドマークとなる参加者を指定しさえすれば、事象スキーマがどんな統語構造に実現するかを、正しく予測することが可能になる。

以上を踏まえ、本稿が問題とする接触動詞の構文を説明したい。第一節で、NP V NPの構文を基本形と見なすと述べたので、この形の説明から始めるとする。以下、例文とその事象フレームを示す。

(12) 基本形

a. Terry swept the floor. (=1b)



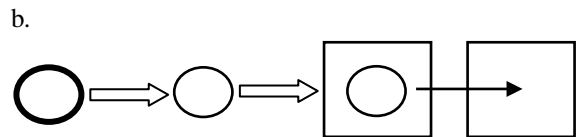
trとlmは、それぞれトラジェクターとランドマークを表す。ここでは動作主と場所/起点のみがプロファイルされ、上で述べたLangackerの考えに従えば前者がトラジェクターとなるので、後者デフォルト的にランドマークになる。これにより、前者は主語に実現し、後者は目的語に実現する。本稿は、文法形式

については(12a)を基本形と見なすので、事象スキーマについても(12b)を基本形と見なす。これにより、(12a)以外の構文のスキーマは、(12b)のスキーマを出発点に何らかの認知的操作を経て得られることになる。

本稿は、基本形(12b)からある事象スキーマに至るまでに適用する認知的操作の回数が、基本形(12b)とこのスキーマとの構造的距離に相当すると考える。ただし、後で述べることに関わるが、再解釈という認知的操作を行う場合は別である。第一節で挙げた例で言うと、基本形(12b)との構造的距離が一番近いのは、(1,2a)、(1,2d)および(4a,b)のスキーマである。(1,2d)はさらに別の形式へとつながっているの、先に(1,2a)と(4a,b)から説明する。以下に示すのが、それぞれの事象フレームである。便宜的なものであるが、それぞれを区別するための名称も併せて示す。

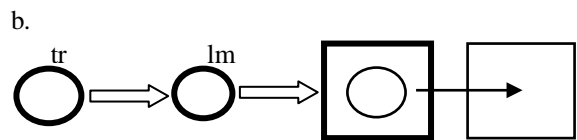
(13) 目的語省略形

a. Terry swept. (=1a)



(14) 道具目的語形

a. John wiped a cloth over the table. (=4a)



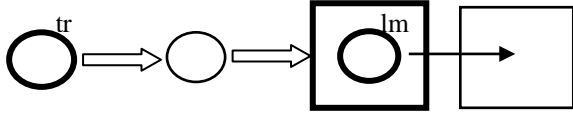
(13b)では、(12b)の場所/起点のプロファイルが取り消されている。本稿はこの認知的操作を脱プロファイルと呼ぶことにする。これにより、(13b)ではプロファイル参加者は一つだけになり、結局これのみが統語項（ここでは使役連鎖の先頭にあるので主語）に実現することになる。一方(14b)では、(12b)ではプロファイルされていなかった道具が新たにプロファイルされている。本稿は、この認知的操作をプロファイルの追加と呼ぶことにする。ここで、基本形に新たに（一つの）プロファイルが追加された場合、新たなプロファイル参加者は、使役連鎖の先頭を除くその他のプロファイル参加者より認知的際立ちが大きい、と考えてみたい。これにより、ランドマークは場所/起点から道具にシフトし、道具が目的語に実現することになる。場所/起点は、ランドマークを解除されてもプロファイルされたままなので、目的語以外の統語項に義務的に実現する。

次に(1,2d)の形式を説明する。以下に示すのがこの事象フレームである。

(15) 起点形使役移動

a. Terry swept the leaves off the sidewalk. (=1d)

b.



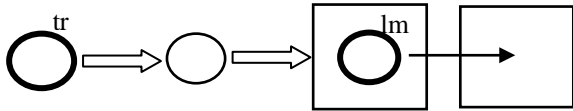
(15b)は、移動物が新たにプロファイルされている。これにより、この参加者はランドマークとなり、目的語に実現することになる。場所/起点は、(14b)と同じく、ランドマークを解除されてもプロファイルされたままなので、主語や目的語以外の統語項に義務的に実現する。(15b)は、(13b)や(14b)と同様に、一回の認知的操作によってできたものなので、これらの三つの基本形(12b)からの構造的距離は同じである。

(15b)にさらに認知的操作を加えたものが、(3a,b)の事象フレームであり、これにさらに認知的操作を加えたものが(1,2c)の事象フレームである。これらは以下のようなスキーマで表される。

(16) 起点省略形使役移動

a. Terry swept the leaves off. (=3a)

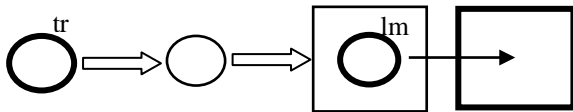
b.



(17) 着点形使役移動

a. Terry swept the crumbs into the corner. (=1c)

b.



(15b)の場所/起点を脱プロファイルしたスキーマが、(16b)である。これにより、この参加者は統語構造に実現しない。(16b)の着点をプロファイルしたスキーマが(17b)である。これにより、この参加者は統語構造に新たに実現している。上で述べたように、ランドマークのシフトは、基本形(12b)にプロファイルが追加された場合に起こると本稿は考える。(17b)は、もはや基本形ではない(16b)にプロファイルの追加が適用された形なので、移動物がランドマークである点は(16b)を引き継いでいる。

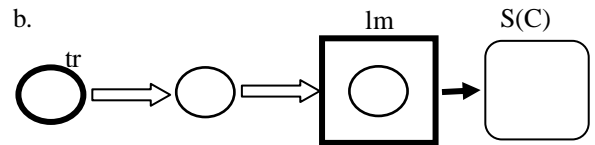
最後に、(1,2e)と(1,2f)の形式を説明する。これら

意味は、これまで説明した構文と異なり、(11)の事象スキーマのみではとらえきれないと思われる。(11)は使役移動のみを表すのに対し、(1,2e)は使役移動によって起こる状態変換事象、(1,2f)は使役移動によって起こる作成事象をそれぞれ表すからである。まず、(1,2e)については、この構文の事象スキーマとして次のようなものを本稿は提案する。

(18) 状態変化形

a. Terry swept the floor clean. (=1e)

b.



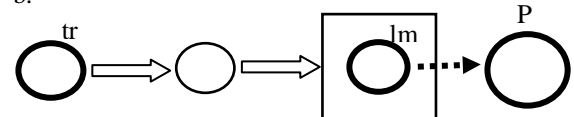
太線矢印は状態変化、角丸四角形は結果状態をそれぞれ表す。このスキーマの後半部分は、場所/起点を表す参加者がcleanというstateになることを表す。前節にて、Boas(2003)が提案するスキーマは(7b)は状態変化が読み取り困難であることを指摘したが、(18b)はこれを明示している。いま述べたように、(18a)は使役移動によって起こる状態変化を表すと本研究は見ている。一方、上で説明した三つの使役移動構文のうち、(18a)と同じく場所/起点を表す項が統語的に実現しているのは(15a)である。この共通点に着目し、本稿は(15b)を再解釈することで(18b)のようなスキーマが得られると考えている。ここで言う再解釈とは、移動から状態変化へと視点を移して事象をとらえ直すことである。これまで何度か言及した構造的距離について言うと、(18b)はその骨組み自体が(11)の形になっていないので、(17b)よりも基本形(12b)からこれが遠いことになる。

作成を表す(1,2f)の事象スキーマとして、本稿は次のようなものを提案する。

(19) 作成形

a. Terry swept the leaves into a pile.

b.



(19b)では構築物(product)という新たな参加者が加わっている。作成とは、材料を何らかの別のものに変えることなので、これを一種の状態変化と見ることもできる。しかし、(18a)が意味する状態変化はthe floorというモノの性質の変化であるが、(19b)のそれ

はむしろthe leavesというモノの形状の変化である。この点を区別するために、(19b)では太線の破線矢印を使ってこれを表している。本稿は、(18a)と同じく、(19a)も使役移動によって起こる変化を表すと見ている。一方、上で説明した三つの使役移動構文のうち、(19a)と同様に移動物を表す項が目的語であり、着点を表す項がないのは(16a)である。この二つの共通点に着目し、本稿は(16b)を再解釈することで(19b)が得られると考えている。ここで言う再解釈とは、移動から形状変化へと視点を移して事象をとらえ直すことである。なお、基本形(12b)との構造的距離が(17b)より遠い点は、(19b)も(18b)と同じである。

5 結語

以上、除去フレームをイメージスキーマ表示し、プロファイル、トラジェクターおよびランドマークといった認知文法の考え方を援用して、接触動詞の多義性とこれに伴う多様な文法形式を包括的に説明した。多義性については、基本形の事象フレームを出発点に①プロファイルの追加、②脱プロファイルあるいは③再解釈といった認知的操作が適用され、それぞれの事象フレームに至る、という形で説明した。これを図式的に示すものが(20)である。[+P]、[-P]、[RI(reinterpretation)]は、プロファイルの追加、脱プロファイルおよび再解釈をそれぞれ表す。L/S、I、T、Gはこうした操作が適用される参加者を表す。

(20) 接触動詞の多義性の仕組み

- a. 基本形 → 目的語省略形
L/S[-P]
- b. 基本形 → 道具目的語形
I[+P]
- c. 基本形 → 起点形使役移動 →
T[+P] L/S[-P]
起点省略形使役移動 → 着点形使役移動
G[+P]
- d. 起点形使役移動 → 状態変化形
L/S,T [RI]
- e. 起点省略形使役移動 → 作成形
T[RI]

事象フレームと文法形式の関係は、次のような考え方を利用して説明した。

(21) 事象フレームと統語項

- a. プロファイルされる参加者は統語項に義務的に実現する。
- b. 上記参加者のうち、認知的際立ちが最も大きいものをトラジェクター、これが二番目に大きいものをランドマークと呼ぶ。
- c. トラジェクターは主語に、ランドマークは目的語に実現する。
- d. 使役連鎖の先頭の参加者がトラジェクターとなる。
- e. 基本形に新たにプロファイルが追加された場合、新たなプロファイル参加者は、使役連鎖の先頭を除くその他のプロファイル参加者より認知的際立ちが大きい。これにより、この参加者が新たにランドマークになる。

(21b,c,d)はLangacker(2008)によるものだが、(21a,e)は本稿の提案である。本稿は、これら五つにしたがうと、それぞれの事象構造がどんな文法形式に実現するか予測可能になると述べた。

注

1. 認可(licensing)は、Boas(2003)の中で極めて重要な術語ではあるが、明確な定義が述べられていない。同研究の議論の流れから、本稿はこのように解釈することにした。

参考文献

- 1) Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (1998) Building of verb meanings. Miriam Butt and Wilhelm Geuders (eds.) *The projection of arguments:Lexical and compositional factors*. 97-134. CSLI.
- 2) Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1991) Wiping the slate clean:a lexical semantic exploration. B. Levin and S. Pinker (eds.) *Lexical and conceptual semantics*. 123-151. Blackwell.
- 3) 中村捷 (2003) 『意味論』 開拓社.
- 4) Dixon, R. M.W (2005) *A Semantic approach to English grammar*. Oxford University Press.
- 5) 都築雅子 (2004) 「行為連鎖と構文Ⅱ：結果構文中村芳久(編)『認知文法論Ⅱ』 89-136. 大修館書店.

- 6) Nemoto, Noriko. (2005) Verbal polysemy and frame semantics in construction grammar: Some observations on the locative alternation. In M. Fried and H.C. Boas (eds), *Grammatical constructions: Back to the roots*, 119-136. John Benjamins.
- 7) Boas, Hans C. (2003) *A constructional approach to resultatives*. CSLI Publications.
- 8) Fillmore, Charles J. (1982) Frame semantics. In The Linguistic Society of Korea (eds.) *Linguistics in the morning calm*, 111-137, Hanshin.
- 9) Langacker, Ronald. W. (1987) *Foundations of cognitive grammar*. vol.1, Stanford University Press.
- 10) Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive grammar: A basic introduction*. Oxford University Press. (山梨正明他訳 (2011) 『認知文法論序説』 研究社.)